

〈資料〉

障がいを持つ学生が実践できるスキー実習プログラムの成果と課題

片山 昭義* 中島 悠介*

要約

車椅子を利用する学生の入学を機に、本学で実施するスキー実習における受け入れ態勢の検討を行なった。そして2018年冬実施に至り、次の成果を確認することができた。まず障がい学生への配慮事項を明示できたことである。具体的には①人的配慮、②空間的配慮、③プログラム参加の配慮である。そして参加した障がい学生は、受け入れ態勢が十分機能した事もあり、初めてのスキー体験を充実した印象深い経験とすることができた。またこれらの経験が、レジャー活動への視野を拓げ次への活動の意欲につながるとともに、生活自立への意欲にもつながったものと思われる。

キーワード 障がい学生、スキー実習、障がい者スポーツ、野外活動、共生社会

目次

1. はじめに
2. 本実習の取り組み
 - (1) 概要
 - (2) スケジュールと実習内容
 - (3) 障がい学生への配慮
3. 研究の方法
 - (1) 参加学生へのアンケート調査
 - (2) 障がい学生のコメント抽出
 - (3) 保護者へのアンケート調査
4. 結果と考察
 - (1) 参加学生からの評価
 - (2) 障がい学生からの評価
 - (3) 保護者からの評価
5. まとめ

1. はじめに

高等教育機関においてスキーをはじめとする野外活動の学外実習を実施する意義は、スキー操作等の技術を習得することのみならず、様々な効果が期待できることにあると考える。徳永は“組織キャンプには日常生活場面の同一期間と比べて「自然との触れあい体験」、「挑戦・達成体験」、「他者協力体験」、「自己開示体験」、「自己注目体験」が得られる^[1]”としている。また高山は“短期間の自然体験活動や組織キャンプであっても、他者関係の向上やコミュニケーションなど「社会的スキル」の向上が確認できた^[2]”と報告している。同じく高山は“スキー実習に絞った研究において、スキー実習への参加は学生のライフスキルの獲得が示唆された^[3]”と報告している。

これらの成果を期待し筆者は、本学健康スポーツコースに入学した車椅子を利用する障がい学生が、スキー実習への参加を可能にする検討^[4]を行い、本学スキー実習（以下、「本実習」とする）の長所を活かしつつ効果的なプログラム展開が可能な実習会場の選定を行った後、障がい学生の受け入れ態勢を確保するため生活面のサポートを依頼する宿泊施設や、障がい者スキーの体験を可能とするスキースクール、そして雪上の移動をサポートするパトロール隊との検討を重ね、2018年3月に本実習を実施することができた。

本稿では、本実習が実施された内容を紹介するとともに、実践で得た成果と課題をまとめ、今後の障がい学生への支援活動の一助としたい。

なお、今回の報告については、障がい学生本人及び保護者の同意と了承をもとに作成することを付記する。

2. 本実習の取り組み

(1) 概要

①目的：

本学においてスキー実習は「スポーツ実技B（スキー）」として位置付けている。「スポーツ実技B（スキー）」は、ディプロマポリシーに定める「医療・保健分野」の専門的知識・援助技術の実際としてスキー・スノーボードの技術習得とその活用を中心に授業を展開する。スキー・スノーボードは子どもから高齢者まで生涯を通して楽しむ事が出来るスポーツである。他方で、障がい者に対しても障がい者が利用可能な用具が開発されており、スキーが生活の質を高める活動の一つとなるなど、福祉とも深い関わりが見られる。

本学総合福祉学部2017SYLLABUSによると「先ず自らがスキー・スノーボードの魅力を感じ、技術の向上などの経験を通して、指導者として子どもから高齢者・障がい者まで幅広い対象に対し、スノースポーツの指導や支援が出来るよう体験させる。」^[5]としており、スキー・スノーボードの経験が無いもしくは経験が少ない学生に対して先ずは自らが経験し、その経験を踏まえて将来の援助対象者である高齢者や障がい児（者）

に対する援助の手段となり得ることを理解するとともに、具体的な援助技術を習得することを目的としている。本実習において実習参加者は、まさに障がい学生とプログラム体験を共にしながらスノースポーツの意義を体感する機会になったものとする。

②参加者及びグループ分け：

参加者は本学総合福祉学部及び短期大学部介護福祉科の1年生29名と総合福祉学部4年生1名（男子19名、女子11名）であった。参加者を性別や学科を配慮し4つのプログラム班に分け、雪遊び体験などを行うとともに、スキー・スノーボードレッスン班として種目別及び経験の度合い、そして一班ごとの人数を考慮して8班に編成した。レッスン班の詳細はスキーが4班、スノーボードが4班であり各班の上限は6名、平均して3～5名であり比較的少人数で丁寧にレッスンが行き届くよう配慮した。障がい学生は障がい者のスキー指導を専門とするスキースクールのインストラクターとのマンツーマンでのレッスンとした。

③実習期間：2018年3月7日（水）～9日（金） 2泊3日

混雑する2月を避け、また短期大学部の実習終了を待って期間を設定した。また、本実習の成果を更に充実させるため、事前研修を本学にて2018年3月3日（土）9:00～16:10にて行い、本実習の目的や雪上における野外活動の意義、スキー・スノーボードの操作技術や装備の解説、実習会場のインフォメーションなど、事前に本実習のイメージを明確に持つことで、現地に着いてから実践的プログラムに集中できるよう配慮した。

④会場：舞子スノーリゾート

本実習で利用する舞子スノーリゾートは、宿泊施設である「舞子高原ホテル&ロッジ」、障がい学生の移動をサポートするパトロール隊が所属するスキー場「舞子スノーリゾート」、そして障がい者スキー専門のスキースクール「ネージュ」が大きなリゾート会社「株式会社舞子リゾート」として一体化しており、それぞれの担当責任者が一堂に会して情報共有できたことが実習会場として選定した最大のメリットであり、実習に大きな成果をもたらした要因として挙げる事ができる。

(2) スケジュールと実習内容

本実習のスケジュールを表1「2017年度浦和大学スポーツ実技B（スキー）スケジュール」に示す。実施された内容としては以下のとおりである。

①レベル別レッスン①～③

（所要時間：2.5H×3コマ、担当：本学教員及び現地インストラクター）

実習前の自己申告により、スキーとスノーボードの種目別、更にそれぞれの経験とレベルに応じてクラス編成を行った。障がい学生はインストラクターとマンツーマンでのレッスン形式を取った。

各クラスにより進め方の差はあるが、概ねレッスン①ではリフト（スキー場の輸送機

器)を使わずに行う用具の装着方法や雪上での転び方、起き上がり方、移動方法など基本的な技術の確認をするとともに、自己申告のレベルと実際のクラスにおけるレベルのマッチングを行った。レッスン②では、リフトを使い緩斜面において基本的なポイントのレクチャーを受けながら基本技術の習得を行った。レッスン③では、ゲレンデを大きく使いながら、景観を楽しみつつ長い距離を滑走することに焦点を当てた。

これらのプロセスにより、参加者の多くはスキーまたはスノーボードの基本技術が習得でき、自身でスピードをコントロールしながら雪上滑走を楽しむことができるようになる。

表1 2017年度浦和大学スポーツ実技B(スキー)スケジュール

3月7日(水)		3月8日(木)		3月9日(金)	
8:15	東川口駅 集合	8:45	ゲレンデ集合	9:00	選択プログラム
8:30	東川口駅 バス出発 ～バス移動～	9:00	レベル別レッスン②		①そり、チュービング ②フリー滑走
				11:30	雪上体験③ ～雪合戦～
12:00	舞子高原 到着	12:00	昼食	12:30	昼食
	昼食、開講式	13:00	レベル別レッスン③	13:15	閉講式
14:00	レベル別レッスン①	16:00	雪上体験② ～そり・チュービング～	14:00	舞子高原 バス出発 ～バス移動～
17:30	夕食	17:30	夕食	18:00	東川口駅 到着
19:30	雪上体験① ～アイスづくり～	18:00	フリー滑走(ナイター) ※希望者のみ		解散
		20:30	演習(交流) 映像を見ながらレッスンの ふりかえり		



図1 「スキーのレッスンの様子」



図2 「スノーボードのレッスンの様子」



図3 「障がい学生のレッスンの様子」

②雪上体験①～アイスづくり～（所要時間：1.5H、担当：本学教員）

実習1日目の夜、雪に食塩を加えることで低温になることを利用し、アイスづくりを行った。アイスづくりは、アイスの素となるジュースなどを雪の中で揺らし続けることが必要であり、そのことをゲーム的な要素として楽しむためのプログラムとして行った。またレッスンのクラスとは別に雪上体験の班を編成することにより、別のメンバーとの交流を図る機会として実施した。



図4 「アイスづくりの様子」

③雪上体験②～そり、チュービング～（所要時間：1H、担当：本学教員）

実習2日目の夕食前、雪上のアクティビティとしてそりとチュービングの体験を行った。会場より本学専用のエリアを借用し、適度な斜面を使って参加者はそれぞれのペースで体験を行った。特にチュービングは用具自体も大きく個人で所有できるものではないので、参加者の関心を集めていた。斜面を滑るスピード感や5～6人でも一緒に乗ることができる一体感を楽しんでいるようであった。



図5 「チュービングの様子」

④雪上体験③～雪合戦～

実習3日目の昼食前に予定していたが、今回は雨天の為中止とした。公式ルールの制定や国際試合の開催などアクティビティとして魅力的なプログラムを、本実習の締めくくりとして体験を予定していたが残念であった。

⑤演習「映像を見ながらレッスンのふりかえり」(所要時間：1.5H、担当：本学教員)

実習1日目レッスン①の終了後と2日目レッスン③の終了後に、同じ斜面を使って習熟度の比較を行った。実際にはレッスン②と③の2回分5時間程度ではあるが、多くの参加者が目に見えて上達を確認できた。用具の使い方やバランスのとり方、スムーズな重心移動、それらの総体として滑走スピードの向上など、実際に映像で見ることにより、参加者自身も成果を実感できたものと思われる。

(3) 障がい学生への配慮

障がい学生が本実習に参加するにあたり、以前に実施したキャンプ実習での取り組み^[6]を参考に①人的配慮、②空間的配慮、③プログラム参加の配慮の3点を行った。①人的配慮は保護者の同行や専門のインストラクターの配置、専属の学生スタッフによるサポート、②空間的配慮はバリアフリー化された宿泊施設を手配することや移動用の乗用車やスノーモービルを準備すること、③プログラム参加の配慮は食事や活動プログラムへの参加に際し、施設やインストラクター、担当講師、学生スタッフと連携し障がい学生が参加しやすい環境を整えることである。以下、それぞれの具体的配慮について記述する。

①人的配慮

1) 保護者の同行

夏季に行ったキャンプ実習に続き保護者の同行を依頼した。大学の教育プログラムに保護者が同行することへの賛否はあると思われるが、障がい学生にとって初めてのスキープログラムに対する精神的不安を軽減することや、日常生活においても入浴など一部の生活動作にサポートが必要なことから、保護者と相談し実習期間中の同行を依頼することとした。

2) 障がい者スキー専門のインストラクターの配置

本実習に障がい学生が参加するにあたり、主たる目的である障がい学生本人がチェアスキーを体験し、一定の技術を習得するためには知識と経験を持つインストラクターが不可欠であると考えた。また専門のインストラクターを外部に依頼することにより、チェアスキーや専用の補助具など特殊な用具も一緒に借りることができた。

3) 専属の学生スタッフの配置

同性で福祉現場での実践経験を持つ学生を障がい学生専属の学生スタッフとして配置し、他の学生スタッフとは異なる役割として任にあたさせた。障がい学生と学生スタッフは普段から面識があり、既存の信頼関係を基礎にした支援体制が構築できたものとする。

4) 教員の役割分担

本実習は専任の教員2名が担当した。1名は本実習のプログラム運営を中心に担

当する教員である。そしてもう一人の教員である筆者は本実習の総括責任者として、施設との窓口や教員・インストラクターとの連携・調整、そして役割の一部として障がい学生とその保護者との窓口として担当した。窓口を一本化することで、障がい学生や保護者の要望を受け取りやすくてきたものとする。

②空間的配慮

1) 乗用車やスノーモービルでの移動

実習会場への行き帰りについては、大型観光バスへの乗降が困難なことや休憩時に障がい者用の駐車スペースを利用しやすいことから、教員が運転する乗用車を利用することとした。また、実習プログラム中に雪上での移動が必要な場合には、事前にパトロール隊に依頼することにより、スノーモービルでの移動の協力を得た。スノーモービルには専用のシートを装着し、障がい学生が安全に移動できるよう配慮がなされた。



図6 「雪上の移動に利用したスノーモービルと専用シート」

2) バリアフリー化された宿泊施設

本実習の参加学生及び教員、学生スタッフは、舞子高原ロッジに宿泊したが、障がい学生と保護者はバリアフリー化された施設である舞子高原ホテルに宿泊した。宿泊施設が離れたことにより、実習としての一体感が損なわれたり、食事の際の移動が必要になるなど運営上のマイナス面は否めなかったが、ゆっくり休息が取れることや生活上の不自由さを感じることなく実習に参加できたことは障がい学生にとっては大きなプラス面であったと考えられる。

③プログラム参加の配慮

1) 食事

障がい学生には食物アレルギーがあることから食事には細心の注意が必要である。この点については宿泊施設担当者との事前の確認を十分に行い、アレルギーの対応

食の準備を行った。また、朝食と夕食は基本的にbuffet形式の為、障がい学生は自分自身で調整できることから、食事面の不都合は全く無かったようである。

2) 活動プログラム

障がい学生はレベル別レッスン①～③に加え、3日目の選択プログラムにおいても専門のインストラクターによるレッスンに時間を充てた。最終日は雨天によりゲレンデのコンディションが悪く最終的には補助具を外して一人で滑ることはできなかったが、3日間で合計14時間に及ぶ個別指導により、スキーの疾走感を十分感じることができるレベルまで技術を習得できたものと思われる。

しかしながら1日目「アイスづくり」と2日目「そり・チュービング」については、障がい学生の疲労度とプログラム参加の困難さから参加を見送り、自室にて休養することとした。これらの対応は、事前に障がい学生及び保護者との協議によるものだが、全員が参加できないプログラムを設定せざるを得なかったことは残念であった。

3. 研究の方法

本実習の成果を（1）参加した学生からの評価、（2）障がい学生からの評価、（3）保護者からの評価の3点から検証する。（1）参加した学生からの評価は実習会場に向かうバスの車内と実習終了後の帰りのバスの車内においてアンケート調査を行った集計結果を基にする。（2）障がい学生からの評価は実習後に課した「実習レポート課題」を活用するものとする。（3）保護者からの評価は実習終了後に質問項目を設定し、アンケート形式で回答を得た。

（1）参加学生へのアンケート調査

①アンケートの調査項目

アンケートは全体で5部構成となっており、参加者本人の変化にも着目して調査した。第1部は参加動機や不安要素、実習プログラムに対する期待度（2回目は満足度）など4項目に関する質問を選択させた。第2部は障がい学生と一緒に参加することの印象を「1：すごく不安」から「5：とても期待している」の5件法で選択させた。第3部は実習中の心境の変化に関する12項目の質問を「1：全く当てはまらない」から「5：とても当てはまる」の5件法で選択させた。内容は学生自身のコミュニケーション力、積極性、自己効力感、他者評価、社会貢献の意識、大学への所属感などである。第4部は実習全体の期待度（2回目は満足度）を0～100の数値で記入させた。第5部は実習に臨む心境（2回目は実習を終えての感想）を自由記述させた。

②対象者

本実習を履修し、障がい学生本人を除いた29名（男性19名、女性10名）に対してアンケート調査を実施した。

(2) 障がい学生のコメント抽出

本実習終了後にレポート課題を課しており、その中のコメントを抽出することとした。項目としては、自分自身についての思わぬ発見、友達・スタッフに対する発見、友達・スタッフからしてもらった嬉しかったこと、振り返ってみての感想の4点である。

(3) 保護者へのアンケート調査

実習が終了した直後、以下の10点について質問項目を設定し、後日回答いただいたコメントを評価とした。

- ①(保護者として)本実習にどのような期待をしていたか?
- ②(保護者として)本実習にどのような不安があったか?
- ③生活面(寝室やトイレ、お風呂等)で不便な点はあったか?
- ④食事の面で不便な点はあったか?
- ⑤お子さんがプログラムに参加する様子を見ての率直な感想
- ⑥お子さんが他の学生やスタッフ、教員と交流している様子を見ての率直な感想
- ⑦実習期間中にお子さんが見せた意外な行動や態度
- ⑧(保護者として)実習期間中に印象に残ったエピソード
- ⑨本実習全体を通しての率直な感想
- ⑩実習が終了してお子さんに何らかの変化は見られたか?

4. 結果と考察

(1) 参加学生からの評価

①実習前の参加理由と実習後に実現できたことについて(図7参照)

実習前の参加理由は、「スキーやスノーボードが好きだから」が5名、「スキーやスノーボードの技術を身につけたいから」が2名、「スキーやスノーボードの指導ができる指導者になりたいから」が0名、「雪上でしかできない体験ができるから」が6名、「友達と一緒に過ごせるから」が2名、「新しい友達を作りたいから」が0名、「単位が欲しいから」が13名であった。それに対して、実習後に実現できたことについては、「スキーやスノーボードを楽しめた」が22名、「スキーやスノーボードの技術が身についた」が8名、「スキーやスノーボードの指導者になる自信がついた」が1名、「雪上でしかできない体験ができた」が6名、「友達と一緒に過ごせた」が5名、「新しい友達ができ」が4名、「単位が取得できた(見込み)」が3名であった。

実習の前の参加目的として一番多かったのは単位取得のためであったが、実習後の実現できたことでは、スキーやスノーボードを楽しめたという項目が最も多かった。その他に、スキーやスノーボードの技術が身についた、友達と一緒に過ごせた、新しい友達ができなどの項目が実習後多くなる傾向が示された。

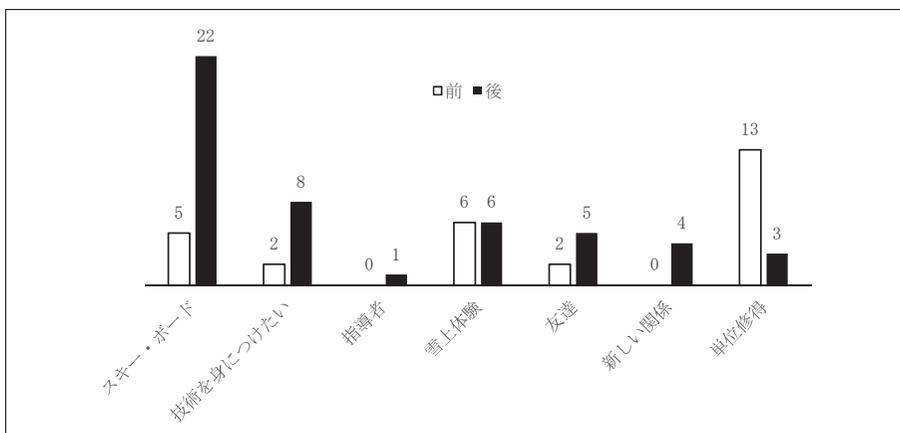


図7 「参加理由・実現できたこと」

②実習前の不安と実習に参加して良かったこと（図8参照）

実習前の不安は、「実習の雰囲気になじめるか」が6名、「怪我をするのではないか」が8名、「スキー場の気候」が5名、「実習内容が十分把握できていない」が3名、「宿舎は快適か」が7名、「食事はおいしいか」が3名、「友達と仲良く過ごせるか」が4名、「準備が十分できていない」が2名、「楽しい体験ができるか」が6名、「スタッフは良い人か」が1名であった。それに対して、実習後良かったことは「実習の雰囲気が良かった」が16名、「怪我をせず過ごせた」が20名、「気候がちょうど良かった」が5名、「実習内容が十分理解できた」が8名、「宿舎が快適だった」が7名、「食事がおいしかった」が12名、「友達と仲良く過ごせた」が14名、「準備が十分できていた」が5名、「楽しい体験ができた」が15名、「スタッフが良い人達だった」が14名であった。全体的に実習後の、参加して良かったことに関する項目の方が多い傾向があった。

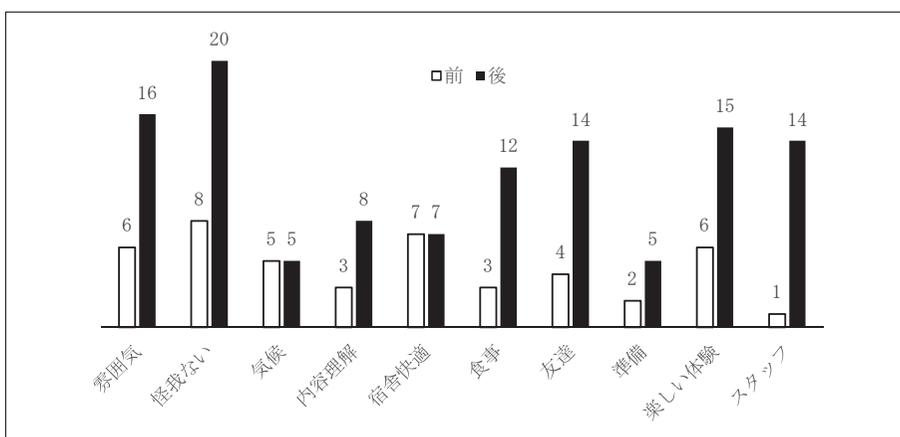


図8 「不安なこと・良かったこと」

③スポーツの得意、苦手意識について（図9参照）

実習前にスポーツを得意と回答した者は8名、どちらでもないと回答した者が14名、苦手と回答した者が5名であった。それに対して実習後に得意と回答した者は13名、どちらでもないと回答した者は11名、苦手と回答した者は3名であった。実習後の方が得意と回答する者が多い傾向、そして苦手と回答する者が少なくなる傾向が示された。

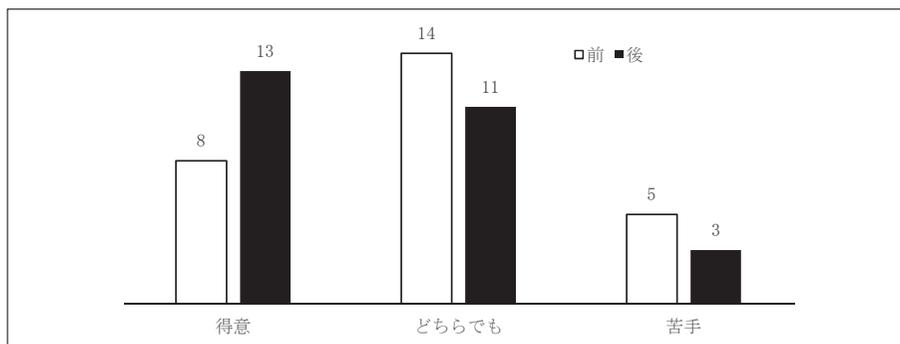


図9 「スポーツの得意・苦手」

④楽しいプログラム、楽しかったプログラムについて（図10参照）

実習前に楽しいプログラムは「スキー・スノーボード」が12名、「アイスづくり」が11名、「そり・チュービング」が7名、「雪合戦」が9名、「ナイター滑走」が9名、「フリー滑走」が6名であった。それに対して実習後楽しかったプログラムは、「スキー・スノーボード」が17名、「アイスづくり」が12名、「そり・チュービング」が11名、「雪合戦」が0名、「ナイター滑走」が15名、「フリー滑走」が14名であった。雪合戦は悪天候により実施できなかったため、実習後の回答は0名であった。しかし、その他のプログラムは実習前よりも後の方が楽しいと回答する者が多い傾向が示された。

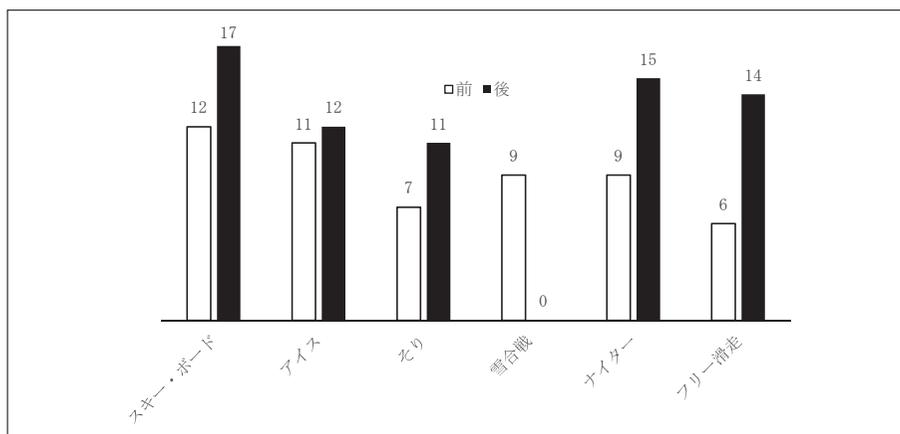


図10 「楽しかったプログラム」

⑤障がい学生が実習に参加することに対する印象について（図11参照）

障がい学生が参加する実習の印象について、実習前には不安と期待に関する項目、実習後には困惑したか有意義だったか参加学生に回答させた。その結果、実習前は不安に感じている学生が3名、どちらでもない学生が15名、期待している学生が9名という結果になった。そして実習後は困惑した学生が2名、どちらでもない学生が6名、有意義だった学生が19名という結果になった。

実習前と実習後の変化の傾向は、困惑と捉える者、どちらでもないと回答する者が減り、有意義だったと回答する者が多くなったことが特徴的である。障がい学生が参加することに関する設問には理由を確認する欄があった。実習前の回答では、「初めてだからわからない」といった主旨の内容が多く、障がい学生と一緒にいく実習のイメージがあまりついていない印象であった。しかし、実習の中で実際にチェアスキーに取り組む障がい学生の姿を見ることで、参加者の障がい者スポーツに対する具体的なイメージづくりとなったことが考えられる。特に本実習では、1日目のレッスン終了後と2日目のレッスン終了後に動画を撮影し、技術の向上を視覚的に確認する内容を取り入れている。その際に、障がい学生の滑りを直接見る機会があったため、有意義と捉える学生が増えたのではないだろうか。

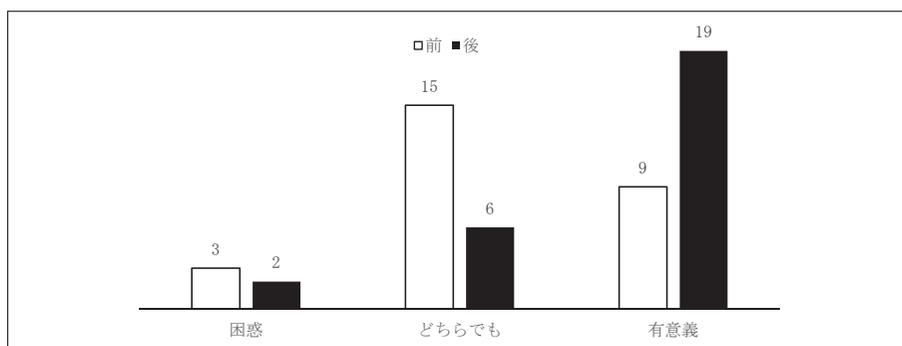


図11 「障がい学生の実習参加について」

⑥実習前後の心境について（図12、図13参照）

実習前後の心境は、「他者とコミュニケーションを取るのが得意である」が実習前は 3.1 ± 1.0 だったが実習後は 3.3 ± 0.9 、「積極的に実習プログラムに取り組めると思う」が実習前は 3.3 ± 1.0 だったが実習後は 3.6 ± 1.1 、「自分が他者からどのように思われているか不安だ」が実習前は 3.2 ± 0.9 だったが実習後は 3.1 ± 0.9 、「恥ずかしさから、その場に応じた必要な行動が取れない時がある」が実習前は 3.0 ± 0.7 だったが実習後は 3.0 ± 0.8 、「今回の実習は有意義に過ごせるような気がする」が実習前は 3.4 ± 0.9 だったが実習後は 3.8 ± 0.9 、「自分に自信がある」が実習前は 2.5 ± 1.1 だったが実習後は 2.9 ± 0.7 、「自分は社会に貢献できている」が実習前は 2.8 ± 0.8 だったが実習後は 3.1 ± 0.6 、「本実習に参加す

る仲間との一体感を感じる」が実習前は 3.0 ± 0.9 だったが実習後は 3.9 ± 0.8 、「本実習でコミュニケーション能力が高まると思う」が実習前は 3.1 ± 1.2 だったが実習後は 3.7 ± 0.8 、「この大学の学生で良かったと思う」が実習前は 3.1 ± 1.1 だったが実習後は 3.7 ± 0.7 、「多少困難なことでもやり遂げられると思う」が実習前は 3.2 ± 1.0 だったが実習後は 3.7 ± 0.8 、「今回の実習に参加して良かったと思う」が実習前は 3.3 ± 1.0 だったが実習後は 4.1 ± 1.1 であった。全体的に実習前よりも実習後の方が好意的な結果となる傾向が示された。特に仲間との一体感、コミュニケーション能力の高まり、浦和大学の学生で良かったと思うこと、実習に参加して良かったと思うことに関する項目は、実習後の方が高い値となる結果であった。また、実習前の期待度と実習後の満足度の図13の結果を見ると、期待度は100点満点中 68.4 ± 18.9 であったのに対し、実習後の満足度は 89.8 ± 11.5 であった。これらのことから、今回の実習は学生にとって意義を感じ取ることができ、満足度が高いものであったことが推察される。

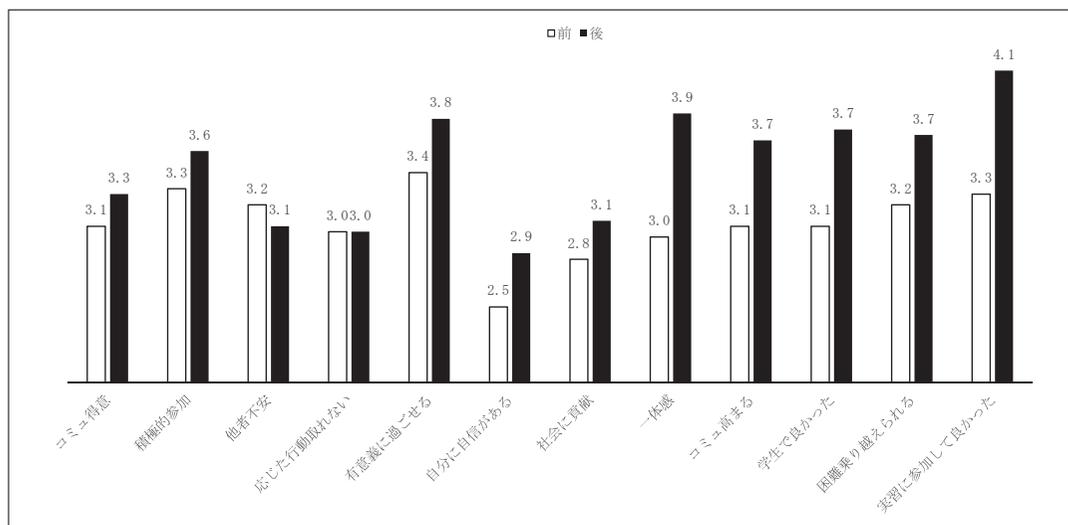


図12 「実習前後の心境について」

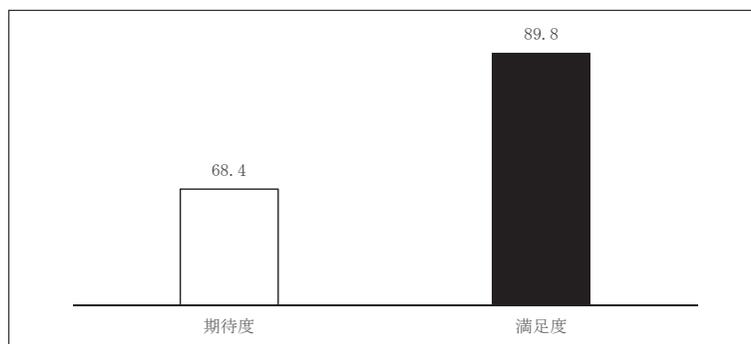


図13 「実習前の期待度と実習後の満足度」

(2) 障がい学生からの評価

〈レポート課題からのコメント〉

①自分自身の思わぬ発見

陸上と違いチェアスキーはかなりスピードが加速されるため、風の抵抗を受けながら滑るということに爽快感を感じ、楽しく滑ることが出来ました。また、滑っていて転倒した時に少し不安感があったものの、恐怖感はありませんに笑顔で取り組むことが出来たので「嬉しかった」と感じられました。それにより「私は、スピードが出る競技が好きで自分に向いている」という事に気付きました。「陸上とチェアスキーの両方を極めたい」と思えるきっかけにもなりました。

②友人・スタッフに対する発見

スノーボードをやっている人は、男性が多いというイメージでした。しかし、このスキー実習で見方が変わりました。スノーボードにチャレンジしていた同級生の女性の滑りが上手くて圧巻でしたし、率直に「格好良いな」と思いました。

③友人・スタッフにしてもらった嬉しかったこと

宿泊先の施設や昼食をとる際の施設の会場には段差や階段があり、1人で行動が出来ないために、参加者の男性や先輩方、そして先生方にサポートして頂いたことが嬉しかったです。また、皆さんが「どのように介助や補助をすれば参加出来るか？」を常に考えながら行動して下さったことが嬉しかったです。

④実習を振り返ってみての感想

このスキー実習は、同級生や先輩、先生方、そして施設のインストラクターさんやホテルの管理者さんのお力添えや環境づくりのおかげで、私は参加することが出来るのだと思います。感謝してもしきれません。有難うございました。2泊3日のスキー実習は、皆で作りに上げた実習だと実感しています。そして、充実したものになったと思います。

【考察】

障がい学生は、本実習で初めて体験したチェアスキーの魅力に十分に習得し、自身が行いたいと思う新しい活動として認識したようである。このことは障がい学生自身のレジャー活動の充実、ひいては生活の質の向上（QOL）に大きく貢献したと位置づけることができる。

一方、今回の本実習で得た体験が、教員や先輩そしてスキー場関係者の方々の環境づくりの上に成り立っていることを理解しており、そのことに対して素直に感謝できることは他者との良好な関係を築くために必要な心構えであると考えられる。また、宿舎やレッスン班が別々であり、他の参加学生と接点が持ちにくい状況の中で、移動のサポートをしてもらったことやレッスンの様子を注目していたことなど、他の参加学生にも注目していたことがうかがえ、同じ実習に参加していた学生としての一体感を感じていたのではないかと推察する。

これらのことは、横山らが報告した“野外活動の成果^[7]”として挙げた①感動と達成感を

与える、②生活技能を高める、③人間関係能力を高める、④自主性・社会性を高める”の4点と符合しており、本実習が、障がい学生の社会的自立に向けて必要でありかつ具体的なスキルが習得でき、そのことを自身も実感できる機会になったのではないかと推察する。

(3) 保護者からの評価

①保護者としての期待

本人が以前からやりたいと言っていたチェアスキーを、まさか実習でやらせて頂けるということで、本人も私たち両親も大喜びしていました。本人は、憧れの村岡桃佳さん(2018年平昌パラリンピック金メダリスト)がやっているということ、そして大好きなスピードを争う競技ということで、とても興味があり、“まずは体験してそのスピード感を味わいたい”という気持ちもあったようです。

②不安点

「転んで頭は打たないかなあ。」という不安はありました。

③生活面での不便

トイレ休憩に関しては、念入りに先方の方と先生方が打ち合わせをして下さっていたので、問題なく済ませることができました。入浴に関しては、浴室が狭かったため、身体を拭いたりドライシャンプーを使用し対応しました。ホテルからロッジへの移動には、皆様にたくさんのご配慮を頂き、スノーモービルにも乗せて頂いて、とても助かりました。

④食事面で不便なこと

こちらも事前に打ち合わせて頂いたので、問題なく安全に済ませることができました。

⑤プログラム参加の様子を見て

まったくの初心者であるのに、初日から(ガイドして頂きながら)かなりのスピードで滑り降りてきて、『怖くないのか』と思いましたが、心の底から楽しんでいるような表情をしていたので、体験できてよかったと安心しました。

⑥他学生、スタッフ、教員との交流の感想

最初は本人にぎこちなさが少し見られたものの、食事などで交流したり所々で周りの方と話をしているところを見て、『徐々に打ち解けて問題なく会話しているなあ。』と、とても微笑ましく見ていました。

⑦実習期間中の意外な行動

以前集団行動をとる時は、周りに気をつかい、いろいろなことで焦りが見えていましたが、スキー実習時は、“自分がすべきことをまず考え、落ち着いて行動することができていた。”ように思います。

⑧印象に残ったエピソード

初日にインストラクターの方が、「本気でチェアスキーをやるなら、協会を紹介します。」と本人に言われたのには驚きました。上にも書きましたが、かなりのスピードで

滑り降りてくるので、『これで初心者のスピードなのか?』と驚きました。

⑨実習を通しての感想

「いつかやってみたいね。」と言っていたものの、私たち家族だけでは実現しなかったであろうことを、先生方のご尽力で実現させていただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。本人は、「楽しかった！またやりたい！今回できなかったことを次はクリアしたい！」と今後に胸を膨らませています。

余談ですが、Teny（新潟のテレビ局）の取材が初日に入り、後日放映されたのを、新潟在住の主人の母に見ていただけたのは、本当に嬉しかったです。普段離れて生活しているだけに、『おばあちゃん孝行できたのかな。』と思っています。

⑩実習後の娘の変化

「ぜひ、またやりたい。」とのことで、実習でお世話になった障がい者スキースクール『ネージュ』さん主催のスクールへ、今後参加することを予定しています。

また、「やったことのない他の競技も全て体験してみたい。」と今まで以上に強く思い始めたようで、いろいろと情報を集めているようです。

【考察】

本実習に同行頂いた保護者からも、肯定的なコメントが多数寄せられた。これらの背景にあるのは、“事前に本実習のプログラム内容やサポート体制を十分伝えることができたこと”と、“実習当日のサポート体制がうまく機能した”ことによると思われる。チェアスキー体験時の転倒等のアクシデントを除き、参加にあたって不安に感じることがなかった点や、安心してプログラムに参加する障がい学生の姿を見て頂けたことは、保護者との信頼関係を築く一助になったのではないかと考える。

芝原らの報告では、“障がい者を抱える家族はできる限りスポーツ活動に参加させたいと考えている一方で、身体的負担やケガ等のリスク管理に不安がある。”ことを示唆している。^[8]本実習では、保護者としてこれらの不安が軽減され、間近で障がい学生のいきいきした表情や困難に立ち向かい乗り越えた力強い姿を目の当たりにできたことは、本実習の効果を実感された瞬間であったのではないだろうか。また、本実習での体験が障がい学生自身のレジャー行動の積極化に大きく貢献できたことは、生活の自立にもつながる可能性があり、保護者として将来的な期待が持てる機会であったと考えられる。

5. まとめ

障がい学生が参加する本実習を事故や病気、途中離脱者を出すことなく終了できたことを通じて一定の成果を得ることができたと考ええる。

その1点目は障がい学生への配慮事項を明示できたことである。これらの事項が全てではないと思われるが、①人的配慮（保護者の同行、専門のインストラクターの指導、専属の学生スタッフの配置、教員の役割分担）、②空間的配慮（乗用車やスノーモービルでの移動、

バリアフリー化された生活施設)、③プログラム参加の配慮(食事、活動プログラム)が効果的に機能したことが、成果を上げた一因であろう。

2点目は障がい学生が高い満足度を得られた点である。全てが初めての体験であるにも関わらず、仲間やスタッフ、インストラクターとの繋がりの中で、自身が前向きに取り組んだからこそ、スキー技術の習得にとどまらず更なるレジャー活動への意欲を感じ、自身の成長を実感することができたのだと思われる。これらのことは、障がい学生の社会的自立に向けても大きな成果と考えることができるのではないだろうか。

3点目は参加学生と障がい学生との相乗作用が見られたことである。参加学生にとってはチェアスキーという用具を初めて見る機会であり、更にその用具を使って仲間である障がい学生が技術習得のために熱心に取り組んでいる姿を目の当たりにしたことは、障がい者の理解に大きく貢献したことと考えられる。一方障がい学生も、参加学生に移動のサポートをしてもらったり、交流の中で頑張っている姿を認めてもらうなど、通常の大学生活では感じることができない密度の濃いコミュニケーションが実現できたようである。

以上述べてきたように、障がい学生が本実習に参加するにあたり、特別な配慮や事前の調整など多くの注意すべき点が必要である。しかしながら、実施した成果は障がい学生本人の成長のみならず周囲の参加学生にも好ましい影響を与えており、本実習に参加したすべての者に有意義な機会であったことが確認できた。

シュライエンらは“インテグレーション(統合)”という考え方を紹介している。“インテグレーション”とは、障がいをもつ者ともたない者が、互いに「参加して良かった」と思えるような素晴らしい体験を得るようにするための、意図的なプロセスを指し、次のような5点の機会を得るとしている。^[9]

- ①大自然の中で障がいをもつ者ともたない者とが共同生活を行う。
- ②自信、自尊心を高める。
- ③障がい者が自立するために必要な生活技術を身につける。
- ④障がい者が自分の障がいを客観的に眺め、否定的な観念を捨て去る。
- ⑤障がいがあるとなかろうと同じ仲間なのだということについて理解を深める。

まさに本学が実施するスキー実習等の学外実習は、これらの点を具現化することが求められており、今後も検討を重ね、この理想の姿に近づけるよう努力していきたい。

【引用文献】

- [1] 徳永幹雄編：『教養としてのスポーツ心理学』p140-142, 201-203, 大修館書店, 2005年
- [2] 高山昌子：「大学生の組織キャンプの効果に関する一考察」, 太成学院大学紀要, 第11巻・28号, p85-95, 2009年
- [3] 高山昌子, 雑賀亮一：『ライフスキル獲得を目的としたスキー実習参加学生の効果に関する一考察』太成学院大学紀要 論文 第12巻(通号29号) p73-78, 2010年
- [4] 片山昭義, 中島悠介, 「障がいを持つ学生が実践できるスキー実習プログラムの試み」, 浦和論叢

Vol.58, p107-120, 2018年

- [5] 浦和大学総合福祉学部, 2017SYLLABUS, p41, 2017年
- [6] 片山昭義, 中島悠介, 「障がいを持つ学生が実践できるキャンプ実習プログラムの成果と課題」, 浦和論叢Vol.58, p201-225, 2018年
- [7] 横山正幸, 藤澤勝好, 「いきいきキャンプの子ども達—障害のある子のための野外活動のすすめ」, 学文社, p119-132, 2005年
- [8] 芝原美由紀, 八並光信, 一場友実, 齊藤利恵, 塩之谷巧嘉, 「肢体不自由児の体育・スポーツ活動の現状と課題」, 第48回日本理学療法学会大会, 口頭発表0-B神経, p174, 2013年
- [9] スチュアート・J・シュライエン, レオ・H・マカボイ, グレゴリー・J・レイス, ジョン・E・リンダース, (芳賀健治監訳), 『障害者野外活動ハンドブック—安全な活動とインテグレーションの実現のために』, [初版], 学苑社, p16-17, 1998年

【執筆分担】

- 片山昭義 (1. はじめに, 2. 本実習の取り組み, 3. 研究方法, 4. 結果と考察のうち (2) 障がい学生からの評価, (3) 保護者からの評価, 5. まとめ)
- 中島悠介 (4. 結果と考察のうち (1) 参加学生からの評価)

Summary

Outcomes and Issues of Ski training Programs that Disabled Students Can Perform

Akiyoshi Katayama, Yusuke Nakajima

On the occasion of admission of students who use wheelchair, we have reviewed preparations to accept their participation in ski training held by our university. As a result, the following outcomes have been recognized in the training conducted in 2018 winter. First of all, consideration points for disabled students have been clearly suggested. Specifically, they consist of ① personal consideration, ② spatial consideration and ③ consideration for participation in the program. With sufficient functioning of the preparations for accepting them, disabled student participants had fulfilling and impressive experiences in skiing they tried for the first time. In addition, it is believed that these experiences may enhance their motivation for other activities expanding their perspective for leisure activity as well as for their independent living.

Keywords Disabled students, Ski training, sports for the disabled, outdoor activities, symbiotic society

(2018年11月8日受領)